

# 代 々 木

秋号

令和三年

平成二十五年五月二十五日刊 郵政特許認可 発行所 〒100-0001 東京都千代田区千代田一丁目1番1号 株式会社マガジク 代表取締役社長 藤巻五十二

明治神宮と私  
渡邊溪壽

明治神宮を訪れた  
外国人たち  
今泉宜子

Mの森 連続フォーラム  
MORI×MAGOKORO

宝物殿開館百年  
特別公開と記念展



# 明治神宮

と私

年四回 祭典にあわせて献花  
明治神宮は、ほっとする場所

「明治天皇祭」の七月三十日、御社殿前の廻廊は、瑞々しい生花で彩られ、参拝者は足を止めて見入っていました。明治神宮では、昭憲皇太后祭（四月十一日）、明治天皇祭（七月三十日）、春の大祭（五月三日）、秋の大祭（十一月三日）にあわせて年四回、「華道敬神会」による生花の奉納があります。明治神宮の敬神団体の中でも最も古い華道敬神会の会長である渡邊<sup>けいしゅ</sup>溪<sup>けいしゅ</sup>壽<sup>けいしゅ</sup>（宏道流華道十二世家元、銀杏岡八幡神社宮司 渡邊<sup>かすとし</sup>和<sup>かすとし</sup>壽<sup>かすとし</sup>）氏にお話を伺いました。

●明治神宮華道敬神会会長

## 渡邊溪壽



銀杏岡八幡神社の境内にて。銀杏の木は、昭和三十一年、明治神宮から移植されたもの



——華道敬神会は、明治神宮の敬神団体の中で最も古い団体なのですが、その結成にあたって、渡邊会長のお爺様が関わっておられるのですね。

**渡邊** 鎮座（大正九年）当初、華道敬神会はなかったのですが、祖父やその他の有志の方々が活動していた大日本華道国風会の関係者が明治神宮の杜づくりに携わっており、お花をしながら神職でもあった祖父は、橋渡しとして明治神宮側に華道敬神会の設立をたびたび申請していたそうです。我が家に記録があり、以前、明治神宮にお貸ししたこともあります。

そしてようやく鎮座十年祭の年（昭和五年）に華道敬神会の設立が認められ、現在に至るまでずっと続けてまいりました。戦前は明治天皇祭、昭憲皇太后祭、秋の大祭の年三回、戦後に春の大祭（崇敬者大祭）が行われるようになって、年四回になりました。

現在、十二流派十七人の会員で構成しております。

——いつも、どのような気持ちでお花

を活けていらっしゃるのですか。

**渡邊** 御祭神のために、御神前が賑やかになるように、また、参拝者の方々の心が安まるような花が活けられるように、まごころをこめております。

御祭神にご満足いただける花を、というのも人間のこだわりになりますから、無心に近い、あまり手を加えすぎるとはなく、さつさと。お花自体も人間の熱を好まないのです、その方が生気のあるお花が活けられるのではないかという感じがします。

廻廊に飾らせていただきますので、風が強い時は困ります。花が倒れるだけならともかく、花器ごと飛んでいく場合もございまして。自然の中のことなので、やはりそうした部分に難しさを感じます。

平成三年の明治天皇祭の日に、高松宮妃喜久子殿下が御参拝になり、お下がりになる際にお立ち寄りいただきました。華道敬神会としてご案内を申し上げますと、妃殿下は御機嫌よくお帰りになった、という思い出があります。年に四回、明治神宮の杜に触れるとほっとしますね。

神籬信仰がある日本  
木を立てて神を招く

**渡邊** あまりおおげさに考えたことはないのですが、そもそも、日本では神籬ひもろぎの信仰があり、立て葉から徐々に生花いけはなとしての様式ができたのではないかという説もあります。

神籬信仰とは、木を立てて神様をお招きして、そこでお祭りごとをして、終わると元のところに帰っていたたくというもので、古来日本ではそのような形でお祭りをしていました。

そこに仏教が伝来して、まず仏様に供えるお花から、だんだん飾るお花になっていきました。建物も寝殿造や流造、権現造などになり、床の間もできて、花を飾ることで住まいの中に自然を取り入れるようになりました。江戸時代には一般庶民もそれをまねるようになり、床の間に花が飾られるようになりました。

明治時代になると、生花は茶道と同じように、花嫁修業や女性の立ち居振る舞いを身に着ける教育としての要素も加わりました。さらに戦後は、西洋の花



明治天皇祭前日に活けられた(撮影：竹崎恵子)

が取り入れられ、芸術性が求められていくようになった、という変遷があります。最近では西洋のアレンジメントのようなお花も流行っていて、日本の花がそうしたものと合体しているのを見ることもあります。

この頃は、花材も季節感がなくなってきました。以前は菊といえば秋でしたが、今は年中あります。花屋にあるものを使います。

実は、東京オリピック・パラリンピックの選手村で流すビデオを撮影しました。何を活けようかと考え、国家の

御安泰と皇室の弥栄を念頭に置き、苔の生した松と黄色い菊を花屋に頼みました。けれども、松は新芽が出始めているものがないということで、苔の生えた羅漢槿らんまきを使いました。撮影では、活け込みの様子と活けたものを撮りました。

——日本には華道、茶道、武道、書道など、「道」の付くものがあります。華道は流派もたくさんあるのですね。

**渡邊** 華道の流派の中でも、江戸時代から続く「古流」と名の付く流派が最も多く、関東だけでも二〜三百の流派があるといわれています。また、古流と名乗っていないなくても、古流の特徴である「真まこと」、「流ながし」、「受け」など枝ぶりを見れば、古流系統だろうということは大体わかります。

中国、明の袁宏道えんこうどうという方が記した『瓶史へいし』が江戸時代に日本に伝わりました。「器はこのようなのがいい」「花の取り合わせはこのようなのがいい」などと書かれており、宏道流も含め、さまざまな流派がそれを研究し、取り入れました。日本人は、海外のものをそ

のままではなく、生活に合うようになる程度応用します。

日本人は「家元」というものが好きなようで、すぐに家元をつくってしまします。それでまとまっていけばいいのですか……。

渡邊家では、宏道流家元を十代目から引き継いでいます。それまでは高弟による相伝ということで、人格・識見ともに優れた人が継いできましたが、なかなか人間関係は難しいようです。一番簡単なのが血筋です。

### 華道家元と神社宮司 伝統文化につながる

——花を活けることは自然を取り入れることだと思のですが、華道の形にはめるということは自然ではないのでは？ と思ってしまう。

**渡邊** そうですよ。中国からきた天地五行など陰陽道の影響も受けています。七五三の空間の割合を取り入れたり、例えば真ん中に立てる「真」であったり、「一の枝」と呼ばれるもの、それに



合わせた形をつくる、ためる」というものもあります。ためることができない、ちよつとでも力を加えると折れてしまう枝もあります。そうした花材の持つ性質に合わせると、同じ形にはできません。同じ花材でも「真」や「受け」(当流では留と言います)に使用すると選んだ枝に、途中から枝分かれして小さな枝が付いていると、その枝を切り落とさずうまく活かして活け上げるようにします。ですから、同じ形のものではありません。

欠点というのはおかしいですが、「ここに枝があれば」あるいは「ここに枝がなければ」と思うのではなく、持っている枝の形や役割を活かしていくしかない気がします。常磐木と呼ばれる松などは、その枝を確かめながら「この枝を落とせばこちらが活きる」というようなことを考えながら、一つの作品に向かっています。

お花は「鑄型」にはめてつくるものではなく、持っている枝の性質や形などを活かすので、同じ花材でも形が変わっていきます。

「美しさ」というのは、全体のバランスですね。

でも、先代は「今日はいままでできた」と思っただことはないと言っていました。自分がうまくなかったと思ったら、そこからは下り坂です。今の人はすぐに質問をします。「どうしてここにこの枝があるのでですか」「なぜ切らないのですか」と。昔の教育

というのは、先生の言う通り「はい」というだけで、「三年間は無言の行」と、先代も言っていました。

——会長は、東京都台東区の銀杏岡八幡神社の宮司もお務めです。神職と家元を掛け持ちされていらっしゃるんですね。

渡邊 よく二足のわらじと言いますが、

同じ日本の伝統文化。特にお宮の方は日本の国柄を大事にしなくてはなりません。車の両輪のような形で、お宮とお花を通じて日本の伝統文化に繋がってほしいかと思っています。床の間は本来、神様をお招きする場所です。



渡邊家に伝わる古文書

そこに掛け軸を飾り、花を活けるのです。

最近はお花をする若い人が少なくなり、昔からやっている人は歳をとってきて、活気がなくなってきましたね。

花屋に行くと、花屋さんですでにオアシスのようなものに挿して、それを買ってきてそのまま玄関先に飾って終わり、という人も多いと思いますが、お花をどうすれば一番美しく見せられるのかということをしなないのは残念です。

「插花は気を休め精神を養うを専一にする術なり」という言葉があります。ぜひ、生活に取り入れていただきたいと思えます。

わたなへ けいじゆ

昭和十八年生まれ。本名は和壽。昭和五十二年、宏道流華道十二世家元を継承。東京都台東区・銀杏岡八幡神社宮司。東京都華道茶道連名代表、大日本華道国風会理事長、(公財)日本いけばな芸術協会参与などを務める。